

『まことの礼拝とは』井上隆晶牧師
フィリピ3章2～9節、ヨハネ福音書4章16～30節

①【罪の告白＝恵みを受け取るためには】

先週のお話の続きです。イエス様はサマリアのヤコブの井戸で、一人の婦人に「水を飲ませて下さい」（7節）と声をかけられました。そこから彼女と水の話がされます。すると突然イエス様は「行って、あなたの夫をここに呼んできなさい。」（16節）と言われました。彼女は今まで5人の男の人と結婚しては離婚し、現在の男の人とは結婚関係を結んでいなかったの、彼女は「私には夫はいません。」と答えます。するとイエス様は「あなたには5人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」（18節）と言われました。なぜ、イエス様はここで彼女の私生活の話がされたのでしょうか。それは彼女に罪の告白をさせるためでした。

●正教会では、罪の告白をしなければ聖餐をいただけません。罪を告白することは「告解機密」といって一つの sacrament になっています。礼拝の前に、神父の所に行って告白するのですが30分くらいかかります。でも皆罪を告白をしたくないので礼拝に50人まっけていても、聖餐を受けるのは10人もありません。中世のカトリックでも同じでした。一年に数回しか聖餐をいただくことがありませんでした。そこで礼拝の中に「共同告解」式文を入れて、それを唱えることによって聖餐に与るというようになったのです。

なぜ、罪の告白が必要なのでしょう。それは謙虚な魂を作るためです。罪があばかれることこそ人間が裸にされることはありません。裸になった人間は、もう自慢も、言い訳もできません。しかしそうならなければ聖霊という水は入れないのです。硬い石の上に、いくら天から雨が降っても、中に浸みこむことはなく、すべて流れて行ってしまいます。同様に、聖霊が降っても高慢な人、罪を認めない強情な人からは去ってしまうのです。また、私たちが告白しなくても、主はすべて私の罪を見ておられ、知っておられます。ここでもイエス様は、彼女が告白する前から、彼女の罪を知っていました。彼女もすべてを告白したのではなく「私には夫はいません」しか言っていません。すべてを言わなくてもいいのです。一言、自分の口で「私は罪を犯しました」と告白するだけで、神はあなたに大きな恵みを与えてくださるのです。4世紀のクリュソストモスもこう言っています。

●「神があなたに罪の告白をさせるのは罰するためではなく、赦すためである。またあなたの罪を神が知るために告白させるのではない。あなたがどんなに重い負債から解放されるのかを、あなたに知らせる為である。」

だから、礼拝の開会祈禱には必ず、「罪の告白」を入れなければなりません。神は「悔い改める者の神」（旧約続編マナセの祈り13節）であり、悔い改めない者の

神ではないのです。でも日本基督教団では礼拝の中で「罪の告白」をしなくなりました。また、あるグループでは「罪」という言葉さえ使わなくなりました。大問題だと思います。改革の必要があります。

②【どこで礼拝したら良いのですか】

「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」(20 節) 婦人はイエス様を預言者だと思い、礼拝の場所を尋ねました。預言者の働きは、罪を指摘することと、罪の赦しの場所を伝えることでした。婦人はただ礼拝の場所を聞いたのではなく、自分の罪はどこに行けば清められるのかを聞きたかったのです。婦人はサマリア人の礼拝からも排除され、礼拝に行っていなかったのだと思います。彼女は「エルサレムに行きなさい」という答えを予期していたのですが、帰ってきた答えは「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」(21 節) でした。サマリア人の礼拝するゲリジム山や遠くのエルサレムに行く必要もありません。真の礼拝とは、場所の問題ではないといわれたのです。どこにいても本当の礼拝が出来るし、どこでも罪の赦しがもらえる時が来ると言われたのです。大聖堂だからまことの礼拝ができるとは限らないのです。

③【神を知っているのはキリストだけ】

イエス様は婦人にいいます。「あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである。」(22 節) 神を知らない者に本当の礼拝はできません。何を拝んでよいか分からないからです。神はまず、ユダヤ人の祖先たちにご自身を現わされました。しかしそれはごく僅かの人にてあり、現わしたのもごく一部だけでした。しかし神はキリストに完全にご自身を現わされました。「御子は、神の栄光の反映であって、神の本質の完全な現われです」(ヘブライ 1:3) それゆえ主は「私はその方を知っている。」(ヨハネ 7:29) と言われます。永遠の神を知るのは、同じ性質の神だけです。被造物は神を知ることには出来ません。本当に神を知っているのは神の子であるキリストだけなのです。故に本当の礼拝はキリストから始まり、使徒たちへ、更に外国人へ、教父たちへ、教会に受け継がれていったのです。私たちの礼拝はキリストから流れて来た聖なる伝承です。カルトの人たちは、神を知らない偽メシアによって教えられた偽りの神に、熱心にお金と時間と命を捧げています。もったいないことです。「どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。」(I コリント 15:2)

④【霊と真理をもって礼拝する】

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今が

その時である。…神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(23～24 節) ここでいう「霊と真理」とは人間の「霊と真理」のことを言っているのではありません。「霊」とは「聖霊」であり、「真理」とは「キリスト」のことです。聖霊とキリストによらなければ、まことの礼拝はできないと言っているのです。礼拝とは神との交わりです。しかし罪ある人間は神と交われません。人の罪を取り除くにはキリストの犠牲が必要であり、そのキリストを信じるには聖霊が必要です。犠牲とは聖餐(無血祭)であり、聖書が分かるには聖霊以外には不可能です。聖餐のない礼拝は、キリスト無しに神の前に出るようなものであって中途半端です。礼拝とは交わりです。一方通行では駄目です。何を言っているか分からない礼拝、神が見えてこない礼拝では駄目です。神からの物が入って来る、神が分かって来る、神の光で照らされて明るくなる、そして神の喜びと命に満たされる、これが礼拝です。キリストと聖霊が働いて下さるからこそまことの礼拝ができるのです。

この後、イエス様は婦人にメシアとは「あなたと話をしているこのわたしである。」(26 節) といわれました。婦人はどれほど驚いたことでしょうか。「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。さあ、見に来てください。私が行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれませぬ。」(29～30 節) とあります。あれだけ人を恐れて隠れるように生きてきた婦人が、自分の罪をオープンにし、人々の中に出で行ってイエス様のことを証しました。彼女を変えたのは何でしょう。それは尊いメシアなのに、罪深い自分を相手にし、この自分を赦し、自分と交わりを求め、自分を大切な人として扱ってくれたという事です。一言でいうなら「神に愛された」という体験です。

● 「ピロードのうさぎ」(マージェリー・ウィリアム) の話し

「おが屑でつくられたうさぎの縫いぐるみは、男の子の興味が電池仕掛けで本物みたいに走り廻るおもちゃに向けられるのを羨ましくも悲しく思っていた。『わあ、ほんものみたい』と喜ぶ男の子の声に、ある日、うさぎは同じおもちゃ箱の年かさの木馬に尋ねるのである。『ほんものってどういうこと。中に何か入っていることなの。』木馬は考え深そうに答える。『ほんものってというのはね、何でできているかじゃない。長い時間かけて愛された時、ほんものになってゆくんだ。そして一度ほんものになったら、一生ほんものでいられるんだよ。』」

いくら物が豊かに与えられても、生活に何不自由することなくとも、人間は決してそれに満足することはなく、淋しくなり、不安になります。それは自分を本物にしてくれる愛にまだ出会っていないからです。人は愛されて本物になってゆくのです。キリストに愛され本物になりましょう。